

在日大韓基督教會
宣教100~110周年
標語
感謝の百年
希望の百年
(テサロニケ第1/5:18)

1963年9月20日 第3種郵便物許可 (毎月一日発行)
2016年7月1日 (金) 第753号

発行所 福音新聞社 (1部100円)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3202-5398 info@kccj.jp
発行人 / 金性済・編集人 / 金柄鎬
印刷所 青丘文化社

青年主日
説教

二つの祈り

＜マルコ1:33-38、マタイ6:9-13＞

金迅野牧師 (横須賀教会)



公生活を始められた後の、イエスの一日とはどのようなスケジュールになっていたのか。詳しいことはわかりませんが、ガリラヤ湖のほとりで漁師たちを弟子にして以降、会堂で教え、痛みを負った人々を癒やすとしても忙しい日々が続いていたことが推察されます。日中の活動の後も、「夕方になって日が沈むと」病いや痛みを負った者をつれて、「町中の人人が、戸口に集まった」(33節)といいます。古代の時間の流れ方は、いまのそれと異なるかもしれません、ただ多忙なだけでなく、イエスの日常が、人間の痛みとかかわる、深く濃い時間に充ち満ちていたことを、福音書の記述の一端から推し量ることができるように気がします。

35節にはそんな日常を過ごしていたイエスが「朝早くまだ暗いうち」に起きて、「人里離れた所」に行って祈る姿が記録されています。祈るイエスの姿は福音書に何度も出てきますが、日常と結びついた祈りとして、この箇所はとても印象に残ります。宣教の仕事をしながら人々と過ごす多忙な日常の連続。その時間の流れから離れて、そして人々の交わりから離れて、一人で祈ることの意味はどこにあるでしょうか。

中高生や青年たちと話していると、彼／彼女らが、「希望」という言葉を使いづらい日常の中を生きていることがわかります。人とどう接して良いかがわからない焦り。いろいろな問題があるけれど、いやありすぎて、どれにかかわっていいのかわからない。自分の悩みや悲しみ、苦しみがほかの人にわかるはずがないと思えてしまう。なにもつかめないままこれから先どうなっていくのかという底知れない不安に包まれている…。なんでもないよという顔をして、さらっと語るその語りの奥底に、誰も聞いてくれることのない、深い痛みの感覚が横たわっているのを感じます。

私たちの日常生活は、いろいろな意味で、さまざまな音に囲まれています。「音」は、耳に聞こえる「音」だけではなく、心を乱すある種の騒々しさを含みます。誰もがそのような騒々しさの中で「静けさ」をうします。そのような騒々しさの中では、誰かが、自分の悩みや苦しみや痛みをゆっくりと聞いてくれるとはなかなか思えません。そして、自分自身もその喧噪にまみれて、悩みの根っこにあるものを深く見つめることができない。ひょっとしたら青年イエスにも「誰

にもいえない」苦しさや痛みがあったのかもしれません。だとしたら、イエスの一人の祈りは、「誰も聞いてくれない」と思える事柄を聴いてくださる方がいらっしゃること、そのことを確認する時間があること、そしてそれがどのように訪れるのかということを私たちに教えてくれているように思います。一人で、神さまとつながる時間の貴さ。そこにこそ日々を生きていく勇気の源が横たわっていることが、イエスの祈る姿勢によって静かに示されています。

ところで、「主の祈り」を通して、イエスは、一人で祈るのとは別の祈りがあることを教えてています。ご存じのとおり、「主の祈り」は、「われら」が祈りの主体になっています。この祈りを通してイエスは、自分のために祈る祈りは、祈りを完結させない、複数の人間が祈りを重ねることこそが大事だと教えています。自分の祈りの課題をそれぞれが持ち寄ること。親しく交わる者同士が互いに他者のために祈ること。いつの日か親しく交わることになることを夢見ながら、まだ見ぬ誰かをも「われら」に含め、その人たちのために祈ること。主の祈りの「われら」という言葉には、自分だけでなく、誰かのために祈ることの大切さが刻まれています。

誰かのために祈ることができるのは、誰かの悩みや痛みを聴き知ったときです。そして、その悩みや痛みが、自分のそれと触れたとき、人間は「わたしはひとりぼっちではない」と感じることができるのではないでしょうか。ですから、誰かの声を聴くことができて、はじめて、人はその人のために祈ることができます。そのように聴き、祈り合う場が、青年たちの交わりの中にいくつも生まれてきたことを、わたしは傍らから何度も目撃してきました。

「一人の祈り」でイエスが確認したのは、誰よりも聴いてくださる方の存在でした。そして人々の痛みを聴く日常に戻り、癒やしの業を示しました。わたしたちも、まず、静かに祈ることを通して、根源的に「わたしはひとりぼっちではない」ということを確認しましょう。そして、互いに「聴く」ことの場を通して、ともに祈る共同体を豊かにしていきたいと思います。青年たちの活動の場が、そのような祈りの連なりとして豊かさを増すことができますように。

在日コリアン文化の創造と多文化共生社会を目指して、在日本韓国YMCAは皆様と共に歩みます。

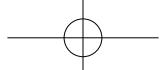


東京◆ホテル：東京で一番安く便利な宿泊研修施設。フロントは日・韓・英語に対応、24時間営業。
10名様～200名様の会議及び宿泊研修(50名)も可能。
◆スペースYホール：200席の多目的ホール。セミナー・コンサートなどに対応。
◆韓国文化教室(チャング・カヤグム・舞踊) ◆韓国語講座 ◆各種こどもクラス
◆YMCA東京日本語学校(3ヶ月～2年、短期研修)
関西◆にほんご教室(新規開講・募集中) ◆韓国民俗芸術科(舞踊・チャング)

税込	平日	休・休前日
シングル	¥6,500	¥6,000
ダブル	¥10,500	¥9,700
トリプル	¥13,500	¥12,500
※朝食:コーヒー¥200(宿泊者価格)		

在日本韓国YMCA <http://www.ymcajapan.org/ayc/jp/> *会員及び教職者割引有。詳しくはお問い合わせください。

東京韓国YMCAアジア青少年センター 〒101-0064 東京都千代田区猿楽町2-5-5 ☎03-3233-0611
関西韓国YMCAアジア青少年センター 〒537-0025 大阪市東成区中道3-14-15 ☎06-6981-0782



各地方会で定期総会を開催

関東地方会

横浜教会献堂式も

4月29日（金）午前10時30分から横浜教会にて、横浜教会献堂式と兼ねて「関東地方会第67回定期総会」が開催された。1970年から1984年まで横浜教会で牧会された金君植名誉牧師（東京教会）が「ニネベに行きなさい」（ヨナ1:1-2）という題で説教し、当時の歴史的な思い出などが語られた。

横浜教会の新会堂は、鉄骨造+鉄筋コンクリート構造、地上3階、地下1階、床面積979m²、総工事費約4億円で1階と2階が打越保育園となっている。

副会長の鄭仁和牧師の司式で聖餐式を行い、午後1時から総代65人中50名の出席で開会され、諸報告後、献議案審議に入り以下承認された。

①東京第一教会から伝道師請聘を受けた金秀明伝道師の伝道認許の件。②長老増員請願の件。（東京中央教会1名、横浜教会2名、ハンサラン教会1名、川崎教会1名）

2016年度の予算案承認後、閉会礼拝、地方会長金根湜牧師の司式により金秀明伝道師認許式が行われた。

（報告：郭恩珠牧師）

**中部地方会**

地方会長に全炳玉牧師

5月5日（木）、名古屋教会にて中部地方会「第53回定期総会」が開催された。開会礼拝は、副会長の高在道長老の司式で、地方会長代行の権潤日牧師（浜松教会）が「教会」（フィリピ1:1～11）という題で説教し、金性濟牧師の司式で聖餐式が執り行われた。

議事に入り諸報告・会計決算報告などが承認された後、献議案審議に入り、次の事項が承認された。

①空席中の地方会長に全炳玉牧師（名古屋南教会）を選出した。②長老選出、増員請願の件（豊橋教会1名選出、名古屋教会2名）。③大垣教会と浜松教会の宣教費補助請願の件。④浜松教会の宣教負担金減免要請の件。⑤地方会規則改正の件。

最後に予算案を審議承認し、閉会礼拝をもって閉会した。

（報告：高誠牧師）

**関西地方会**

宣教師加入、伝道師認許

5月5日（木）京都南部教会において「第67回関西地方会定期総会」が開催された。総代82名のうち、67名が出席し十数名の来賓および准総代の参席があった。開会礼拝においては姉妹関係を結んでいる釜山東老会の書記全在典牧師により「靈的な自尊心を守ったモルデカイ」（エステ3:1-6）という題で説教がなされ、副地方会長の朴成均牧師の司式により聖餐式が執り行われた。

引き続き金忠洛、洪珉基牧師の宣教師加入式、裴貞愛氏の伝道師認許式があり、長年新儀教会で牧会された崔炳釤牧師の引退式が兼ねて行われた。

礼拝後、議事が進行された。来賓の紹介・祝辞の後、各部の報告があり、監査・決算の報告があった。献議案としては①長老増員の請願の件（京都教会2名、大阪北部教会2名、大阪西成教会3名、堺教会1名、大阪教会3名、浪速教会2名）、②地方会規則改正の件、③関西聖書神学院理事会理事・監査・学院長の認准の件、④納骨堂委員会規則変更に関する件、⑤2016年度の予算案が承認された。

（報告：李元重牧師）

**西部地方会**

川西と西宮弟子教会が合併承認

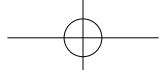
4月29日（金）新居浜グレース教会にて第32回西部地方会定期総会が開催された。副会長白承豪長老の司式のもと開会礼拝が始められ、地方会長金承熙牧師の「歴史の真っ只中で尊く神様」（出エジプト記3:10～15）を題する説教があり、安辰男牧師の司式により聖餐式が執り行われた。

総代41名の内33名の出席で議事が始まり、前会議録・各報告は文書による報告とし、承認した後、会議録審査と報告書審査の報告があった。会計監査報告、会計報告の承認後、案件討議に入った。承認された献議案は以下のものである。

①川西教会と西宮弟子教会の合併承認の件。②伝道部長選任（梁榮友牧師）の件。③西宮教会臨時堂会長選任（李聖雨牧師）の件。④新居浜グレース教會長老1名選出の件。⑤地方会規則・内規改正の件。最後に予算案を承認し閉会礼拝をもって閉会された。

（報告：朴斗熙牧師）





西 南 地 方 会

対馬に伝道所設立

西南地方会第66回定期総会が、4月29日、宇部教会で開催された。開会礼拝では、副会長の金定明長老の司会のもと、「地の塩、世の光」(マタイ5章13～16節)と題し、地方会長の朱文洪牧師が説教された。また崔栄信牧師の司式のもと、聖餐式が行われた後、対馬めぐみ伝道所委任予定の朴榮喆牧師と沖縄教会委任予定の郭鏞吉牧師の宣教師加入式が合わせて行われた。

定期総会は総代26名中22名が出席し、各種報告を受け、特に4月14日・16日に継続して起きた熊本・大分大地震による被害を受けた熊本教会・別府教会の被害状況の報告の後、献議案審議が行われた。承認された献議案は以下の通り。

①長老員、選出の件(小倉教会1名、福岡教会2名、福岡中央教会1名、別府教会1名選出)。②宣教協力部設置に関する件。

る規則変更の件。③視務牧師を担任牧師に名称変更する件。④対馬に伝道所を設立する件。⑤徐源享牧師の沖縄での伝道所設立の件は、継続審議となった。その後、厳しい財政のため負担金の引き上げに理解を求めた後、予算案が承認された。

(報告:金明均牧師)



沖縄教会

郭鏞吉牧師委任式及び
李元洪長老将式挙行

5月19日(木)沖縄教会において、郭鏞吉牧師委任式・李元洪長老将式が行なわれた。

臨時堂会長兼西南地方会長の朱文洪牧

師の司式のもと郭鏞吉牧師を宣教師として後援しているソウル東崇教会の徐廷午牧師の「実を結ぶ人々」(ヨハネ15:1-8)という説教があり、郭鏞吉牧師に対する委任誓約、宣布が行なわれた。

郭鏞吉牧師は1971年韓国で出生、ソウル市立大学、長老会神学大学院を卒業し、2007年に牧師按手を受け、昨年に大韓イエス教長老会(統合)総会から日本宣教師として派遣された。

将立された李元洪長老は1963年韓国で出生、幼少期に両親と渡米し、米軍人として沖縄に勤務、その後軍属として滞在していた。沖縄教会には1995年から仕え、2001年からは按手執事として奉仕していた。

(報告:金明均牧師)

第53総会期 第2回常任委員会開催

4月15日(金)大阪KCCにて第2回常任委員会が行なわれた。特に前日(14日)の夜に起きた大地震により被害を受けた熊本教会の金聖孝牧師から電話により報告を受け、参席者一同祈りをささげた。主な決定事項以下の通り。

- ①大阪築港教会の宗教法人法改正の件を承認。
- ②今福教会の負担金減免の件は条件付きで承認。
- ③韓聖炫牧師の「ヨーロッパ宣教師」要請の件を承認。
- ④関東地方会から停職/免職判決を受けた東京教会5人の長老による「判決不服とする」控訴の件を受け、総会治理委員会を組織する。(委員:鄭然元(長)、鄭守煥、金承熙、朱文洪、李大宗、牟大盛、林英宰)
- ⑤2018年に迎える「KCCJ宣教110周年」行事準備委員会組織の件を承認。(委員:金性済(長)、尹聖哲、趙永哲、金成元、鄭然元、金明均、鄭守煥、金迅野、金武士、金英淑)
- ⑥第54回定期総会日程/場所の件:2017年10月8日(主日)～10日(火)於:神戸東部教会。
- ⑦社会委員会提案の「人種差別撤廃基本法を求める教会声明」を採択する。
- ⑧次回常任委員会:2016年10月14日(金)於:大阪教会

対馬めぐみ伝道所設立

開所式及び朴榮喆牧師委任式挙行
西南地方会に新しい教会が誕生



5月26日(木)、対馬めぐみ伝道所の開所式及び朴榮喆牧師委任式が挙行された。

西南地方会長の朱文洪牧師の司会/司式により行なわれた。総会長の金性済牧師の「キリストの平和の光を放つ灯台として」(エペソ2:14～22)との説教があり、伝道所設立の経過報告後「対馬めぐみ伝道所」の開所が宣言され、続いて対馬めぐみ伝道所を牧会する朴榮喆牧師の委任式も行われ、地方会長による委任誓約・宣言がなされた。

委任された朴榮喆牧師は1959年韓国で生まれ、東国大学校卒業後、6年間高校の国語教師を経て長老会神学大学院を卒業し、1996年に牧師按手を受けた。その後、対馬キリスト福音教会の要請により2012年から韓国語教室を開き日本人に韓国語を教えるながら少人数で韓国語礼拝を行なっていた。西南地方会の伝道所設立の要請や宣教師派遣手続き等を経て2015年大韓イエス教長老会(統合)総会の日本宣教師として正式に派遣された。

釜山からほど近い(直線距離50Km)対馬は朝鮮通信使の通り道であり、日帝時代には多くの韓国人が居住し1934年に設立された対馬巖原朝鮮キリスト教会の1周年記念写真には60名ほどの信徒が写っている。(下の写真:KCCJ宣教100周年写真集CDから)新しく出発した対馬めぐみ教会が、日本と韓国の海峡の架け橋となることを願う。

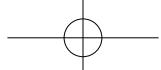
住所:〒817-0014 長崎県対馬市巖原町天道茂530

TEL/Fax: 0920-52-8080, 080-6436-9807

Email: holytime5925@naver.com

(報告:金明均牧師)





7月の焦点 青年会全国協議会 「いまを生きる」青年として

◆「生きづらさ」

日々を生きる誰もが、「生きづらさ」を感じているのではないでしょか。現に「ヘイトスピーチ」のような直接的な暴力があります。しかし、実際に多くの人がどのように感じて、考えているのかわからないという問題があります。

震災や放射能のことでの苦しむ人々、どんどん深刻になる貧困やますます拡がる格差、命がけで国を逃れる人がいる一方、その人たちを入れるなど叫ぶ人たち。いろいろな問題がこの世界にはたくさんあるけれど、何をどうしたらいいのかわからない、そんな自分がいます。日々、「なんだか人生を生きていない」…そうつぶやく心の声、自分にとって深刻な痛み、辛さが、ほかの人にとって「大事なこと」にならない。そういう「生きづらさ」を、私をはじめ、多くの青年がいま感じています。

青年会全国協議会(全協)は、礼拝や賛美を通じて、共にクリスチヤンとしての生き方や人生の悩みを打ち明け、葛藤を共有できる仲間が得られることを願って、全国の教会青年に参加を呼びかけています。未来の在日大韓基督教会を担う青年の育成とともに、他の場所では作れない「信仰の仲間」をつくろうと。全協のプログラムを通じて「楽しさ」だけではない、悩みや苦しみを共有するなかで、ほんとうの「希望」や、「弱さ」のなかにこそ現れる「強さ」を学びました。

◆出会い、学び、表現する

全協は、大きなプログラムを年間二つ開催しています。2月に開催される「青年のための研修会」は、初めて参加する人が多いプログラムです。自己紹介から始まり、自分の生き立ち、信仰観など、深い話ができる実りのある時間を過ごします。

8月に行われる3泊4日の濃密な旅「夏の修養会」は、思いつ



きり身体を動かすスポーツ大会、礼拝と賛美、聖書ワークショップを通じて、自分の思いや仲間の言葉、聖書の言葉に耳を傾けます。また、ヘイトスピーチなどの「いま」を生きる青年にとっての切実な問題をとりあげ、学ぶ機会を作ります。そこで講師の方々の言葉や、仲間と交わす言葉、そして自分のなかにある悩みや苦しみを重ねることは、ただの勉強とは違うものをもたらします。メインイベントでは、参加者が少人数の分団に分かれ、3日間で学び感じたことを短い劇にして発表します。深いテーマを、ユーモラスで等身大の表現を通して、個性あふれる寸劇を披露しあうことを通して、学んだことを再確認します。

この二つのイベントに参加した青年は、口をそろえてこう言います。「来年も絶対に参加する!」と。

◆「いまを生きる」青年として

全協の活動は、私たちの努力だけで成り立つものではありません。在日大韓基督教会に集うすべてのみなさまに支えられていることを覚えつつ、悩み、痛む、「いまを生きる」青年として、イエスの言葉に励まされながら、また一步を進めていきたいと思います。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのものに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔軟で謙遜な者だから、わたしの輻を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの輻は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ 11:28~30)

張晶洙(全協副代表)

熊本だより

～被災地支援活動に参加して～



4月14日午後9時26分、突然、地中から突き上げるような激しい地震。6月8日から11日にかけて、飯塚拓也牧師(日本基督教団龍ヶ崎教会)、申容燮牧師(大阪KCC)、尹善博牧師(博多教会)と共に現地を訪問した。今回の訪問は、熊本教会のボランティアの働きのために、車両を提供した飯塚牧師と共に、関東から熊本へ車両を移動するというミッションも兼ねていた。

教団九州教区議長の梅崎浩二牧師を迎えて、今後の被災者支援の方向性について話し合われ、確認されたのは、西南地方会も九州教区も、お互いに組織的な問題を抱えていて、なかなか動きづらいこと、しかしながら協力して被災者支援への第一歩を歩み出したい、という思いを互いに強く持っていることだった。

滞在中に、実際に被災者支援の働きにも携わることができたことは、大きな恵みであった。金聖孝牧師(熊本教会)は九州臨床宗教師会が主催する「カフェ・デ・モンク九州」の一翼を担っており、これは被災者の方々がほっと一息つきながら胸の内を吐露するとのできる「無料カフェ」の活動で、訪問者である私たちもこの活

動に加わることができた。2ヶ月経った今でも建物の中にいるのが怖く、車中泊やテント泊を続けている人たちがかなりいるということをカフェの活動を通して初めて知ることができた。

各教派・団体のボランティアセンターの訪問もした。特に印象的だったのは、聖公会の聖三一教会に設置されたボランティアセンターだった。このセンターでは、いろいろな制約のある社会福祉協議会のボランティア窓口に頼るのではなく、自力で活動場所を開拓している。益城町で被災者の方々に手作りのおかずを渡したり、飲み物を配ったりしながら被災者の方々に声をかけ、そこからがれき片付けや家財の整理などの仕事を請け負っている、ということだった。

マスコミの報道からほぼ消えてしまったが、熊本の被害は本当に大きく、多くの人たちが、苦しみのただ中にいる。在日大韓基督教会も「ひとりひとりに出会い、寄り添う」活動に、なんとか邁進できれば、と思う。引き続きの関心と祈りを切に願う。●許伯基牧師(京都南部教会・熊本地震被災者支援プロジェクト委員)

